6/24 赤旗

貧困に向き合い

安倍・自公政権による福祉切り捨て・生活破壊が進むなか、経済的な事由で医療を受けられない人が増えています。貧困や格差と向き合う医療現場の取り組みをみました。（青野圭）

福井県に見る

無料低額診療 3年で8倍

自己負担分を肩代わり

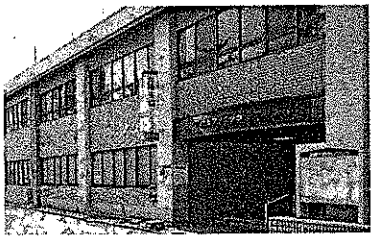
福井市にある光陽生協クリニック（平野治和院長）では、2014年から無料低額診療（無低診）に取り組んでいます。

1年目は相談13件、認定は4件でしたが、3年目の昨年は相談46件、認定は8倍以上の33件に急増しています。

3年間の全相談者のうち、相談時の収入が生活保護基準以下の人が60％、同基準110％以下（国民健康保険料の窓口自己負担10割減免）が12％、同基準110～130％（同5割減免）は19％。生活困窮者が全体の9割を超えています。

クリニックの田嶋清孝事務長は「患者さんの自己負担分を医療機関で肩代わりするわけですから、金額的には痛手です。しかし、命にかかわることですから、やめるわけにはいきません」といいます。

しかし「無低診で医療費は減免できますが、介護費用や薬代は患者さん負担」と制度の限界も。



光陽生協クリニック

「該当する方はもっと多いと思いますが、自分から『つらい』といわれる方は非常に少ない。私たちも救い切れていないのです」

2年前から無低診を受けている男性（75）。心臓の病気で同クリニックに通院していましたが、薬が切れる日になっても、なかなか受診しませんでした。「お薬、そろそろ切れますよ」。職員からの電話にも、男性は「年金があたる偶数月は余裕もっていけるけど、奇数月は我慢してた」と。

「保険証があっても、お金のことが心配で受診を差し控える方が多いのです。重症化して、どうにもつらくなってから来院されます」と田嶋さん。「さらに、この男性のように薬を間引くのです」

国保料を滞納すると、有効期間が1～6カ月の短期証が交付されます。短期証で受診する人がいると、通常は有効かどうかに関心が向きがちですが「私たちは何らかのメッセージだと思うようにしています」。

経済的事由による手遅れ死亡事故 福井の場合

【2016年】

自営業の男性（64）。4年前の検査で肺がんの疑いが分かっていたにもかかわらず、国保料の滞納に加え、家族を支えるために入院治療を拒否し手遅れに。

【2015年】

生活保護基準以下の暮らしぶりにもかかわらず、〝申請がない〟として生保を受給できなかった男性（77）。「下血、下痢、嘔吐（おうと）を繰り返し、風呂にも入っていない寝たきりの高齢者がいる」との通報で往診。すぐ入院したが、1カ月後に死亡。

無料低額診療　社会福祉法2条3項に基づいて、経済的な理由などで受診できない人に、一定の条件で医療費を免除・軽減（半額）する制度。実施している施設は全国で647カ所（15年、厚生労働省）。

無料低額診療制度を知らせる福井県医療生協のリーフレット

全国で手遅れ死亡事例58件

全日本民医連が3月末に発表した16年の「経済的事由による手遅れ死亡事例調査」では、全国641事業所のうち、28都道府県で58件の死亡事例が報告されました。福井県でも、毎年1件ずつ報告されています。

福井は「幸福度ランキング」（日本総合研究所）で、11、14両年に続いて16年もトップ。平野院長は「このような県ですら、手遅れ死亡事例が連続しています。貧困問題は全国どこでも深刻さを増している」といいます。

県内で無低診を実施しているのは8施設。このうち、同クリニックを含む6カ所が全日本民主医療機関連合会の施設（全国では370）です。

命救う医療は今

薬を間引く患者

込められたメッセージに耳傾け

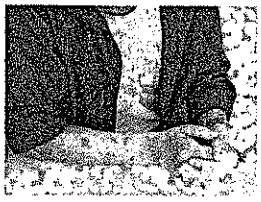
無低診を受ける一人ひとりの〝物語〟に耳を傾けると―。

「薬を間引いた」男性は先ごろ、長く連れ添った認知症の妻をみとりました。20年以上一人で介護してきました。

3度の食事、掃除、洗濯も毎日。お風呂に入れ、オムツも替えました。「リズムをつくらな、ぼけっとしてると、ばかになってまうで」と頑張りました。

男性は20歳過ぎから丁稚奉公に出ます。給与は月3000円程度で「健康保険どころではねかった」。30歳を前に、給与が7、8万円台になったところで、やっと国民年金に入り以来30年余、保険料を払い続けました。

65歳から受け取れば月8万円になると分かっていましたが、60歳で退職を迫られました。年金は4万円。亡くなる前の妻の年金と合わせても11万円足らずでした。「切りつめるのは、やっぱり食費。これだけ切りつめないかんなとか、いろんな考えると寝られん」



思いを語る、無低診を受けた男性

ヘルニアで歩くのもつらい男性に車は必需品です。「近所にスーパーもないし、病院もこられん」。車検代と車の税金が悩み。税務署に分割を相談しています。「いい病院に恵まれたと思ってます。だれも相談することなかったでぇ。助かっています」

16年8月1日、早朝のNHK「おはよう日本」で同クリニックの取り組みが紹介されました。2人のアナウンサーがコメント。「この制度は医療機関にはあまりメリットがなく、善意による制度ともいわれています」「高齢者の経済格差が大きな問題となっているなかで、善意だけに頼らない何らかの対応が求められています」

クリニックの平野院長は「行政のあり方が一番重要」といいます。「人口約27万人の福井市で、生活保護に対応する相談員は18人しかいません。1人平均107件、これではきめ細かい対応などできません。相談に訪れた方の状況をよく聞いてほしい」

深刻さ増す現状語る

雨宮処凛さんと平野院長が対談

雨宮さん

平野院長

福井県民医連は6月上旬、作家の雨宮処凛さんを招いて貧困問題をテーマに対談を企画。平野院長が、対談相手兼進行役を務めました。

雨宮さんは貧困と向き合ってきた自身の半生を紹介。働く人の4割を非正規が占め、非正規・女性の平均年収が貧困ライン（122万円）をわずかに上回るだけの142万円であることなど、深刻さを増す格差と貧困の現状を語ります。「非正規が4割、自然にそうなるわけがありません。貧困は政治によってつくられている」

〝あなたよりもっと困難を抱えている人がいる〟〝昔はもっとつらかった〟などの言い方について、「これを〝犠牲の累進性〟と名付けた社会学者がいます。直訳すると『うるさい、だまれ』。これは人を黙らせる作法だ」と喝破しました。

雨宮さんは、貧困問題に向き合う若者の動きとして、「社会的正義の実現」を求める若者グループ「エキタス」を取り上げました。最低賃金時給1500円を求めて15年12月13日に行ったデモを、「いまの貧困問題のすべてがこのスピーチにある、伝説のスピーチ」として紹介しました。

「不幸比べもうやめよう」

藤川 里恵さん（25）

ねえ、なんで選択肢に社会保障制度や労働組合がないんですか。だれも何にも教えてくれないくせに、知りもしないくせに、「おまえより大変な人はいる」「自分も苦労したけど、何とかなった、社会のせいにするな」…そんなこといわれたって、おなかいっぱいになんかならねぇんだよ。あと、どれくらいかわいそうなら、あとどんな経験すれば満足なんだよぉ。

私よりかわいそうな人がいたら、なんなんですか…不幸比べも我慢大会も、もういいかげん終わりにしませんか。もう、十分だろう。おかしいことはおかしいって言って、いいだろう。

雨宮さんが紹介した「伝説」のエキタス・デモでの訴えから（当時23歳）